

ユトレヒト大学エディカトリウム 1997年 レム・コールハース+OMA

連続展開する空間

'90年代の建築設計思想に少なからず影響を与えた組織にレム・コールハース率いるOMAがある。仏国立図書館('89年)やジュシュー大学図書館('92年)のコンペ案が注目された。前者は書架で埋めたキューブの中に閲覧室をヴォイドで穿つ案。後者は規則的に立つ柱の中に街路を引き入れ、スラブを立体的に連続させる案で、斬新であった。

そのOMAは、'85年、ユトレヒト大学から、市の東側にあるキャンパスの再整備計画を依頼された。そこは開発された時代を反映し、近現代建築の学部校舎や研究施設が分散して建ち、相互の関係性が乏しい状態。その整備方針に沿った最初の建築がエディカトリウムである。

全学の共用施設であり、学部を超えた出会いと交流の中心施設である。併せて国際的な学会も開ける400名と500名収容可能な2つのオーディトリウム型の大講義室を備える。また、一人一機の150名~300名収容の試験ホール4つやパーティなど催事も行える学生、教職員共用の1000席のカフェテリア、自由に学生が集えるラウンジなどを含む。

敷地は、市街地から進入する東西方向の構内幹線に面する南側、ほぼ中央に位置する。

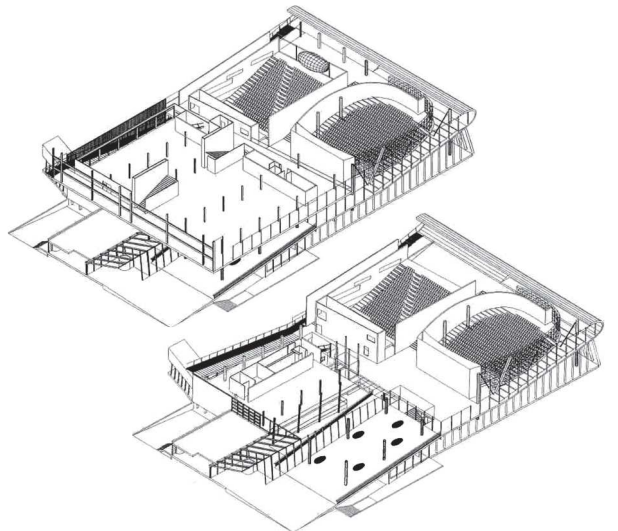
この幹線側の立面に断面構成が明瞭に現れている。1枚のコンクリート・スラブが東端の入口から斜め上方へ、地面が連続するように緩く伸び、中間で水平になるが再び上方へ斜行し、端部では丸みを帯びてめくれ上がり、半円壁に変貌して反転し、屋根スラブとなる。この屋根スラブは中空に浮く逆コの字型のスラブの中間へ4層レベルで伸びる。地上から2階への斜面斜路、水平部は2階の床、続くは大講義室の段床の部分。逆コの字の底辺と伸び来る内部化した屋根スラブは3、4階の試験ホールの床だ。大講義室の下、1階は、徐々に天井が高くなるカフェテリアである。一枚のスラブの表裏に特性ある空間が連続展開する。

平面は各階縦横十文字に4分割しており、1階中央にカフェテリアへの進入路と2階への斜路を割り込ませ、2階に広い横断スペースを設け、併存する大講義室やラウンジへ導いている。二つの講義室の間は幅広の緩い階段が貫く。2階では、大講義室に対向してラウンジがあり、その上3、4階は試験ホールの配置だ。2つの大講義室や3階の試験ホールの外周は通路が巡り全体に回遊性がある。幹線側の大講義室の側壁は湾曲しており、その北側壁は全面ガラス壁。明るく清々しい。南側の大講義室は閉じ視聴環境を機器に委ねる。特性が異なる2室を併置している。

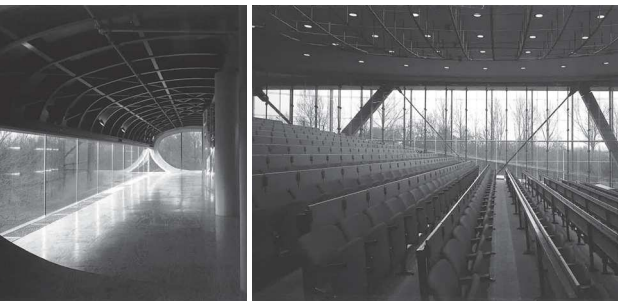
その頃のOMAが実現した建築は、複雑に錯綜するか、即物的で粗くなりがちだったが、この建築には、創意が活きて質を伴う洗練があり、伸びやかな空間構成がある。



北側外観 1階右側カフェテリア、2階大講義室 3、4階試験ホール



上 2階~3階空間構成図 下 1階~2階空間構成図



左上 大講義室背後の通路 右上 北側の大講義室 北側全面ガラス
左下 1階から2階への斜路 右下 カフェテリア 右側ガラス面は斜め